HQ
1.J6
Z74

Copr. 1892
No. 312

女學雜誌

第三百十二號
明治二十五年四月九日發兌

老子を讀む
小説　黒頭巾
迎春行
詩人バイロンの母
文學上の聯想

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 312. APRIL 9th. 1892.

EDITORIAL:—In Pursuit of Spring. (No. 3.)
TOPICS OF THE DAY:—Association of ideas in Literature.
MISCELLANEOUS:—On "Rōshi." (No. 1.) (Tenchishi.)
HOUSEHOLD SCIENCE:—Nursing and Wet Nurse.
BIOGRAPHY:—Byron's Mother. The insane Catherine. (N. N.)
NOVEL:—"Kurozukin." (No. 2.) (Jiuhachikōshi.)
CRITICAL NOTES:—"Lessing." "Midaresaki." The Nature of Christ. "Tomochidori."
"THE FRIEND OF THE ORPHANS."
CONCERING WOMEN:—
WEEKLY NEWS.

第三百十二號目次

●迎春行
●論說　文學上の連想（下）（櫻井彥一郎）
●雜錄　老子を讀む（上）（天知子）
●家政　育兒法、乳母（秋子）
●史傳　詩人バイロンの母、狂女カセライン（N. N.）
●小說　黑頭巾（第二回）（十八公子）
●批評　烈眞具○みだれ咲○基督教約說○基督の自然○道の栞○友千鳥—四集
●孤兒之友
●女報　さまゞゝ
●物價

皇后陛下
明宮殿下　御覽濟の書

再版

（リツトル。ロード。フホントルロイ）

小供のよみ本

小公子

巖本善治妻譯

譯者の序に曰く、母と共に野外に逍遙する幼兒が、幹のくねり、尋常ならぬ一本の立木に指ざして、かあさん、あの木は小さい時誰かに踏れたのですネィ、と申したとか。考えて見ますと、美事に發育すべきものを遮ぎり、素直に生ひ立つ筈の者をくねらせる程、無情なとは實に稀で御坐り升。邪道に陷らふとする父の足をとゝめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の德を思ひ起させるは、神聖なる天職を擔ふ可愛の幼兒に限ります。私は深く幼子を愛し其恩を思ふ者故此珍重すべきまろうどを倘一層優待したいと切に願ふ者です」と。斯る主意にて譯成る。原著は近頃英米に轟き渡り、子供の讀物として愛々しきと潔き事の類ひ無きは更にも言ず、白髮の老者も心頑なの人も、之を讀る間は天使に接する如しとて、推賞大方ならず、改版十數回、且尙ほ劇に演して非常の喝采を博しぬ。譯者は斯る原文の味を損せじとて辛苦せられ、紙數二百八十頁、密書十四箇入の大本として今日世に進め玉へり。

一冊正價三十八錢。郵稅八錢也

發兌元　女學雜誌社

（賣捌店）○東京。瑞穗屋、丸善、小林、東海堂、武藏屋、東京堂、巖々堂、須原屋、金港堂、大藏屋、中西屋、布美乃屋、重陽堂、誠之堂、○横濱。丸善○京都。東枝律、大黒屋○大坂。福音舍、岡島、梅原、○神戸。福音社、○熊本。草野、○函館。福音舍、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第三百十二號
明治二十五年四月九日發兌

迎春行

（八）

洛陽城裏喇叭の聲

西京人の食物は、粗惡無類、古へより既に諺となれり。左れど、滊車一通し、魚肉の價ひ格外に低廉となりたる今日に於ては、庖厨の献上も自づと變はらざるとを得ず。運動躰操の事の如きも、亦庶幾くは然わらん歟。眼を放つて洛中洛外を觀るに、天に黑煙を吐發する製造所あるは唯一つのみ。人々大率ね個々の家の內にて手細工に從事す、鬱居せざらんと欲すとも得じ。故に、彼等が逸樂は、茶、花、の類にて、多くは亦た家の內にて執り行なふ。凡そ、此種の習俗を打ち、多少の改良を成さしめんとには、例せば、市の眞中に公園を設置する如き經綸を立るを可とす。現に、此の設けなきにあらねど、修整何如にも殺風景にて、戶內の人を招き出すに足らず。京都公園の改良大ひに講ぜずんばある可らざる也。然るに、亦た再考する所ろに據れば、盖し、洛陽の水のほとり、東山の山のかげ、皆これ此の地の人の爲に公園たるなり。而して夕陽沒せんとする前、或は、銀燭光り熱するの頃ほひ、逍遙乎として出でゝそゞろありきする人引も切らず、西京人は斷じて出遊せざる人種にはあらざる也、國の粹は必らずしも打破すべきものにあらず、優雅麗美なる斯の地の人の風は長久へに存するをよしとす、但だ其の躰格を强健にし、精神を快活にするの手段に至りては、志士の意を注ぐべきものなりとす。惟ふに、公園を設くと云へども、只だ此まゝの人の質にては、遂に益を成すとなけん。戯れに似て實は嚴肅なる一の立策に云く、所謂る尙武の心根を軍事によりて養成すべし。而して其法は、此の都びたる可愛の地を殺伐たる兵卒の足にて踏ませんとするにはあらず、彼の師範校、中學校、醫學校、商業學校もしくは同志社學院等の書生は言ふに及ばず、此地に限りての別格として、高等女學校及び同志社女學校などの優しき姬方の居ます所ろに至る迄で、喇叭を朝夕に用ひて勇ましき尙武の音を洛陽城內に反響せしめ、時には亦た足並を揃へて、市中を運行せしむるなど極めて妙なるべし。此策たる、たゞに市民一汎の氣を引立るとの多きのみな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らず、學生自身等が周邊の不勝なる習慣に化せらるゝの弊害をも除去するに足らん。敎育に、個人の上より衆に及ぼすと、衆の上より個人に及ぼすとの二あり、敎育に所謂る個人的、國家的の眞の意義は、當に然あるべきもの也。京師に於ける愛都の敎育者諸君、何んぞ此の簡易にして奏功確實なる一策を試み玉はざる。

(九)　疊山を出で、流水に浮ぶ

西京を去つて、大坂に入れば、光景の俄然として一變するとを感ず。山、四方を圍み、雲、滿天に低くし、流淺く、河骨を露わし、家居、花車、人面惣べて白きの態に引かえ、此處には、煙突聳然として天を突き、所々に立つて、黑煙を吐く、其狀すでに偉なるに、巨川大河の水、洋々として到る所ろに流る、無數の聯想を齎らし來る大坂城は、白壁を光と水とに映して、東に屹然として聳え、居宅家門の結構むしろ古しへの武士の搆えに近し、人の歩みも早く、車の響も高し。全躰の光景、遠く西の都と異る。實に、大坂は、水の地なり、商人の地なり、貿易の地なり、此地の人は進み易かるべし、然れども守ると能はず、豁達流暢なるとを得べし、謹嚴愼重は其能はざる所ろならんか。青年會館に於て、余は二夜、演說す。廢娼論に於ては曰く、關西の社會改良論は大坂より起らざる可らずと、此地の人氣率先主唱に和するの能力あるが故なり。女子敎育論に於ては曰く、此地の人は深く家庭の結合脩整に注意せざる可らずと、此地、新來の客多く、人斷えず出入してホームを動かすとの多きが故なり。余は、二つ乍ら、大坂人士の特質に對せる芻者の忠告なりと信ず。

(十)　一望開豁の地

神戶に至りては、關西の横濱なり。たゞ横濱に異なる所のものは、基督敎の感化すでに骨髓に入れるの一事あると是のみ。試みに、港灣に近きほとりの人に向ひて、師範學校は何處ぞやと聞かば大方の人はかゝる學校は未だ耳にせずと云ふなるべし。土地の人は、殆んど、學事に注意せざるなり。然れども、此地、山を負ひ、水に臨み、氣候極めて溫暖、交通極めて便なるがゆえに、縣廳あると共に多くの學校あるなり。一日、山に登り、青松疎々たる間だより、風光明媚なる遠景を眺望す、四方開然として心氣自づから廣ろらかなり、喩へば、一天一地すべて打開きたる春の如し。則はち敎育者

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

某等に語りて曰く、凡そ此地に敎ゆるものは、特に忍耐、持重、謹愼、堅確などの覺悟を養ふとに熱せずんばある可らず、此地の學生は、肺病を患ひざると共に憂鬱に陷いるとはなかるべし、然れども、輕滑の才を得ると共に深密の膽を失なふの損あらんとす、敎育者は深く此に戒心せざる可らずと。

(十一) 宗敎の感化

大坂神戸に到り、ことに喜ばしきは、基督敎の感化意外に行渡り、關東人の未だ味はざる樂しみを享るを得ると、是れ也。惟ふに、言語のしとやかなる、人氣の優調なる、土地の狹きなどによりて、實際交はりの温かきよりは、表面にむしろ多く其裝ほひを示すの躰なきにあらじと念したれど、而も尙ほ宗敎の感化遠く關東の地に優るとを確認しぬ。余は、基督敎徒が支配する旅宿なるものに、生來初めて寄泊し、未曾て感ぜざりし一種の安樂を享たり。神戸に在ては、禁酒宿と稱する畠中に於て、大坂に在ては「丸て」と號する蘆田に於て宿りぬ。都にホームを遺し、行さきを假りの宿とする此の漂々たる游子孤客に、意外の家を備えたるの惠みは、到底、之を基督敎に歸せざる可らず。中にも、神戸なる畠中に於て、階を登りたる正面に、禁酒廣告の一文を掲げたる、其文何如にも美、そゞろに書きし人と、書かせたる主人との心を感ぜしめたり。此主人、土佐の人にて、今は、多聞敎會の執事たり、平素、土佐の傳道に一方ならず盡力すと聞く。送り迎への客に、引札を配らずして、禁酒の小册子を配る、用意愛すべき哉。われ、亦た、路をありき、或る書店に入り、店頭の婦人、何如にも沈着にして相貌俗ならざるを察し、后にて聞けば、此書肆も亦た基督敎徒の家なり、國民新聞が安息日を休まざるによりて、其賣捌方を謝絶したるとありと云ふ、一大快報にあらずや。其地、道をゆき、合ふ所ろの人の相貌を察て、是も亦た吾黨の人かと思はるゝもの甚はだ多し。軒三つ四つを並ぶる間だには、必らず一軒の信徒の家ある心地す。安息日に於ける此の多忙繁用の地の景況は、ことに人を感動するに足ると聞く。蓋し、五歩に一戸、戸を閉ぢて業を休むものある也。

(十二) 移住及び宗敎

明治四五年の頃か、日本に於ける新敎最始の敎會を設立したるは即はち横濱に於てす。暫らくして、之に次ぎ、第二に起りたるを、神戸に於てとす。ともに、開港場に於て福音の第一

粒を播きたるは、こゝに外國宣教師が足をとゞめたるの故に由と云ふと雖ども、亦一の頗ぶる注目すべき天教存す。凡そ、如此き開港塲に出で來る人民は、善惡の何れにも卓出すべき、非凡の能力を備ふるものなり、而して、忠を決し舊慣を脱し、郷關を出で丶一新の地に入る、何れにせよ、其心大ひに動き亦大ひに進むの時なり。如此き地に於ける傳道の必要は、何ものにも優る。不幸にして、之を欠かば、則はち、人心大ひに惡に動き、敗德の風習長久の根礎とならん、如此き地は遂に亡ぶるの外なき也。今や、神戸は、惡風に拮抗して基督教の勢力すでに一歩の勝を得たり、横濱に於てはすでに一歩の負を取れり、北海道に至つては、既に大ひに後れたり。今の論客、北海道に民を殖し、金錢の益を獲取するの策にのみ眩して、其百年の長計を忘る。北海道に於ける百年の長計は、實に傳道に在る也。凡そ、新地に移るの民は、ピウリタンの如くなるべし、之を導びくものは、モーセの如くあるべし。宗教道德に注意せざる人の殖民開港策は、寧しろ國を毒するもの也。

（十三）客舍

經に云く、旅人を懇ごろにせよと。余れ深く此の句の味ひをさとりぬ。よりて思ふに、旅宿の制一變せしめざる可らず、而して、吾黨の士にして、挺身、之に當るものあらば、之を一變する實に難からじとは信ず。夫れ、旅は大ひなる説教なり。旅客を宿するの家は、謹しみて此の妙理を契悟せずんばある可らず。然るに、我國從來の宗教家は、毫も此に懸念せず、反りて、宗教をもて、宿舍の風儀を敗亂せしめたり。例せば、下總の成田、信州の善光寺、伊勢の津、讃岐の琴平、の如き、何れも、歸依參詣の人の爲に特更ら宿屋の風儀を不潔にするものなり。驚ろくべきの怪事にはあらずや。吾黨の宗教家は必らずや此宿弊を一洗し、客舍をして、第二の會堂（日暮れ燈くらく寂然孤臥、沈思沈想せしむるの點に於て）、第二のホームたらしむることを旨とすべし。然して、宿屋現今の待客方に於て、甚はだ不快を感ぜしむるものあり、此は今より直ちに改良するも可あるべし。即はち、客の、服、髯、荷物等によりて、一見上下を判し、部屋を割當るの習は是れ也。且や、茶代の惡弊も亦少なしとせず、夜のもの丶準備も、不用意千万なりと謂つべし。余をして若し現今直ちに實行することを得べき理想を言はしむれば、左の如し。部屋を眺

望、裝飾などによりて、上中下に分ち、此品によりて、部屋代を明らかに定め、附きの女中を、一人やとい又は掛持によりて祝儀若干と明らかに定め、且つ、廣き宿に於ては、禁酒の客の爲に一方の數室を備へ、隣房喧囂の難を豫防し、夜着に悉とく、白布を被ふべし。

(十四) 竹

西京より大坂に向ふ途、滊車の窓より右左の景色を見てあれば、向町より山崎に至る邊、所々、竹林うちつゞき、千竿列を正す、壯觀にてありき。日本の庭、松竹梅を配するをもて最上とす、實にこれ申分なき趣味なり。松の嚴そかなるに、竹の直きと、梅の潔ぎよきとを加はふ、殆んど間然する所ろなしと謂つべし。然れど、余は、中に就きて特に竹を好む。其の清潔にして單純に、高雅にして脫俗せる、たとへば、君子の衣冠を畧し、氣樂に逍遥するの躰あり。此の姿もとより愛すべし。然れども、余が竹を愛するは、云々の理由ありてと云ふにはあらず、心何にとなう自づからにして之を好めるなり。平素思へらく、もし餘暇と資力とありて、田園山林の内に莊園幾千かを有し、都門濁塵の外に一搆の居宅を建つるとあらんには、四方に竹林を茂らせて樂しまんと。今ま旅中に万千の青竿を觀、平素の懷を禁ずると能はず。

(十五) 山崎

滊車の外にて、車丁「山崎」と呼ぶ聲きこゆ。思はず、首べを擧て、外を見れば、小ざき祠あり、社頭、老梅樹の花すでに過ぎ、今や落片散々たり。憶ふ昔し英物、恨を呑みて隱退するとき、此花、亦た均しく開き、等しく散りしや何如に寂々寥々たる舊跡、只今唯見る一老梅。

(十六) 敎會及牧師とは何ものぞ

大坂にて、月の末より組合敎會員の大會ありと云へば、此に出で會はんとて、神戸より復た引もどす。此度の行さま〴〵の望はありと云へど、關西諸敎會の有樣を視察し、兼ては平素懷抱する敎制改革の一事を當路の人に質さばやと思ふとありしがゆえなり。此の心をもて好機なればとて暫し灘波律の葦に招かる。或る時、大會の席上、微弱なる敎會を助くるの法、並に傳道師養成の法など云へる議題出づ。此等は余の最とも掛念する案なれば、耳を聳だてゝ打聽く。杉田潮君の説に、都の牧師と山間の牧師とを折々入れ替はらしむべし、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其の尤とも容易く行はるゝは、夏休みなどの節、例へば海邊と山中と都と片田舍と、其牧師を交替せしめて一つには休養の爲にし、二つには、敎導を新鮮にすべし、又、折々は有力なる人西方に巡回して到る處ろの敎會を動かすべしとあり。宮川經輝君は、屯田策傳道と稱し、依然ポーロの精神手段を用ひて傳道すべし、又一地方一部會を編み、相合して入費を集め、めぐりにめぐりて番巡に大演說會を催ふすべしとなり。横井時雄君は、牧師の自修を緊要とし、牧師たらんものは、信仰に兼ぬるに、見識と學力と度量となかる可らずと云ぶ。綱島佳吉君亦た云く、宣敎師はたゞ信仰の一方にのみ偏長す可らず、智慧も、躰力も共に伸び、圓滿の發達を爲べしと。藏原惟郭君は云ふ、信徒の仕事に、聖俗、神人の別を立つるは、神の合せ玉ふ賜ふものを離つなり、牧師傳道者は今ま更に社會の上に立入らずんばある可らずと。內村鑑三君は云ふ、傳道師養成に最とも大切なるは、其使命を享けたる人を傳道學生となすにあり、即はち宗敎的意識の熾んなる人を擇びて敎導するにありと。傳道會社長たる海老名彈正君之に續ひで云く、願くは各地方より神學生を送らるゝ人の注意を請ん、現今の狀態たる、他の學科に落第せし人あれば、然らば神學生となさんと云ふ、困る人あらば神學生にでも爲んと云ひ、甚はだしきは、何にも役に立ぬゆへ神學校に入れんと云ふものありと（此時聽衆笑ふ、何等の悲しきとぞ）。デビス氏奮然として立つて云く、同志社從來の邦語神學卒業生合計四十七人、此內現今實際に役務する者四十人、殘七人の內二人は眠り、五人は傳道に不適當となれり、而して如此き好結果の統計表は、歐米の神校學に於ても聞くも極めて稀なる所ろなりと。余ひそかに思へらく、所謂る敎會、及び牧師、並びに其養成法と云ふが如き事、惣じて不常理の方向を執れるにあらざる乎。況んや微弱なる敎會を助くると云ふが如きとは、余が愚見に照しては、殆んど意義なきととなるを覺ゆ。左れど、純然たる理想の上の敎制なるものを暫らく度外に置き、目下、日本を救ふの一策として、所云る敎會及び宗派の如き團躰を堅成するの必要あり。此の目今の必要と遠永の理想とを比較し、果して之を何如に調和せしむべき。短識、之を決しがたく、思ひ煩らひて謹しみて先輩の說を聞かんことを欲す。此行あるゆえんの一なり。

（十七）孤兒院の軍歌

招かれて大坂救兒院を見る、十數の孤兒半圓狀に列立し、余が爲に軍歌をうたふ、石井十次君が作と云ふ、

あゝ兄弟よ同胞よ　決して失望するなかれ

一聲唱へ出すとき、余は感涙を飲みぬ、

何如に位は高くても　何如に智識は深くとも
鼻より息氣をする人を　決して頼むとなかれ

石井君慷慨の語調勃々たり。

（十八）浪華の女學

ビショップ、ヘヤー嘗て語りて云ふ、大坂は女學校の爲に胃病を患ふべしと。來りて來るに、やゝ其觀なきにあらず。九万五千の家、四十七万の人の地は、左に表示する多數の女學校を荷へり、

市立高等女學校	私立界女學校	梅花女學校
五花街裁縫女學校	平地裁縫女學校	相愛女學校
山口裁縫女學校	家木裁縫女學校	中國女子手藝學校
一致女學校	ウイルミナ女學校	プール女學校
照暗女學校	婦人學習會	師範校女子部

貧民女學校

生徒の數は十四五人より、上み、二百人に至る「學科は意外に高尚、（高尚と云はんよりは、寧ろ格外）なれば、此地出生の婦人にして入つて、學ぶは多からず、大抵は關西地方より留學するものなり、廿三年末、即はち、今日よりは學事の熱心高かりし頃ろ、尋常小學に入れる女子一万〇百四十二人にして、高等小學に移りたるもの一千三百八十二人、而も業を卒へたるもの當時僅ほ一人も存せざりしの躰なれば、特に此地の爲に女學校を設けんとするものは、一層、學科を簡易實際にせずんばある可らず。府廳の某參事官は云く、此地の人、敎育の爲に金を出すに平ならざりしとはあらず、而も之に熱心なりしとは未だあらずと。思ふに、此の富豪の地の爲に、其黃金を用ひて活ける人物を養成する熱心なる敎育者、他鄕より此に來らざる可らず。

前號の迎春行、一頁の終り、紫苑山人の歌を脱す、其歌は左の如し、

我袖のぬるゝ別れも嬉しきは
花見む君が門出なりけり

論説

文學上の聯想（下）

櫻井彦一郎

叙して爰に至れば予が心理の聯想作用は我邦現時の文學の狀態を思ひ起さしめ、嗟嘆せざるを得ざるあり、素より今日の文壇は未だ大文學者の出現なく、これに據るものは小文學者の徒なるを以て大に責む可からずと雖、道を大文學者の爲に備ふるの任ある彼等、即ち新文學の芳芽の傾向多くは靑々たる新色を裝はんとするに非ずして、却て舊文學の調を慕ひ其古色を裝はんとし、其嫩葉既に枯れたるは、彼等の責を免かれざる所なり。かの小説家を以て自任せる輩の爲す所を見るに、僅かに二三十枚の短篇を以て針大の事を描くに留まり、會長篇あるも短篇より劣れり。彼等の思想は之を譬ふるに盆に盛りたる水の如し。且西鶴其磧輩の惡文學を摸倣せんとするの弊は、高尚なる途を離れて卑猥の巷に赴くを以て、其作大抵遊野浮薄の徒が好色の短話なり。紅葉の小説は父母敎師の前に繙くこと能はず。正直正太夫が作は花風病者の囈言なり。奇男兒、對髑髏を作りて異光を放ちたる露伴も、辻浄瑠璃寢耳鐵砲に於て己れ花街の内幕に通曉せるを傲り。茅渟之浦浪六が人に骨なく、腸は魚河岸にのみありと憍りて一個の俠骨男兒を寫したる三日月は、少しく見るに足りしも、其新著井筒女之助は露姫山賊に犯さるゝの條に讀むに堪えざる語あり。不德の小説界を蹂躙せる思ふべし。彼等小説家は曰く、寫實派なりと。寫實可なり、然れども實際なるもの豈に彼等が作る所の如き好色の事のみならんや。清潔なる德義の行はるゝも實際なり、貧者の爲に一飯を割くも實際なり、義人斷腸の思をなすも實際なり、親子、朋友、夫婦の愛も實際なり、情交も實際なり。世は濁れたりとも此等はなほ存せり。然かるも彼等小説家は此種の實際に眼孔を閉ぢ、汚穢忌む可く如何なる狂徒も白晝公行する能はざる實際に烱々たらしめんとするが故に、彼等の藻思は從て穢れ、事に伴ひて來る觀念は臭氣あり、文に顯はるゝものは嫌ふ可し。かくの如きは今日小説の風なり、詩歌も、或は韻文を綴るものありて、五七の調に巧なれども、氣韻なし。氣韻なきは作家の思想に氣韻なく、聯想氣韻ある間に運行して或は回想し、或は想像をなすを得ざるを以てなり、

今論鋒を轉じ、文學の受動的作用に於ける聯想を考ふるに、夫れよく文學を味ふ者はよく聯想するものなり。よく聯想するものは其働くべき境界の宏濶なるものあり。詩歌文章小說の死語を心理に復活せしむるに非らざるよりは此等のもの何の味か有る。天性瞽なる者には沈魚落雁閉月羞花の語を以て美人を想像せしむること能はず。蔚林綠草は詩人の為に詠歌せらるゝも、牧童の為には牡犢を驅り入れらるゝなり。聯想の作用によりて關係、類似、比諭の本心を探り索むるに非らざれば之を窮めたるシミレ、メタホア、シネクドキー、メトノミトメも懸り言、冠辭も比興そへ歌なずらへ歌たとへ歌も、文も、賦も、單に無意の語なりと見ゆるに過ぎず。紀貫之曰「力をも入れずして天地を動かし、目に見へぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の中をも和らげ、たけきものゝ心を慰むるものは歌なり」とされど、天地、鬼神、武夫、男女にして歌によりて聯想を起すものなくんば動かされ、哀れと思ひ、和らげられ、慰めらるゝ事なし。吾人の胸間一片の悲哀あるが故に「うたたねもしかりてのなき寒哉」といへる句は何となく悽然たらしむ。もし親を喪ひたるものにして此句を讀まば、必ず其父母を追想して涙潸然たるべし。シオンの山の歌の純潔高尙なる、敬虔の念をして益々鞏固ならしむるの價あれども、神を愛するを知らざるものにはたゞ無味無價の歌なり。愛情あるものには、愛情の文學は彼れが親子、朋友、夫妻、情人等に於ける愛慈を伴ひ起して其妙味を覺えしむ。子ある者は

世の中に思ひはあれど、子を戀ふる
思ひにまさる思ひなきかな

その歌を己れの物となすべし。人いへることあり孔明が出師表を讀みて泣かざる者は忠臣に非ず、李密が陳情表を讀みて泣かざるものは孝子に非ずと。蓋し忠臣に非らず、孝子に非らざるよりは、泣鳴するに足るべき同情の醒起せらるべきものなきを以てあり。太白の詩、子美が歌、もし人をして聯想を起さしむるにあらずんば、飄揚して僊せんと欲せしむる能はず。慷慨激烈し欷歔して絕せんと欲せしむる能はざるなり。文學は時代を表し、或は時代を含み、作者の境遇人物によりて其色を殊にせるを以て、此等に於ける智識を有するに非らずんば、其妙趣に到ることを得ず。李白が

長安一片月、萬戸擣衣聲、秋風吹不盡、總是玉關情、

何日平胡虜、良人罷遠征、

といへる詩も、其時代戰後の苦みを譏りて言を戍婦に托したるなるを知りて味わり。杜常が

行盡江南數十程、曉風殘月入華淸、朝元閣上西風急、都入長楊作雨聲、

とは、華淸宮、一たびは、玄宗皇帝貴妃を携へ、爰に宴遊悅樂せしも、一朝漁陽の鼓、邯鄲の榮花の夢を破りて、貴妃馬嵬に、塵埃に塗れてより、管絃鐘鼓其聲を藏め、滿目荒凉たるを。吟じたるなるを知て初めて其價値を認め。

行くれて、木の下蔭を宿とせば、花や此夜の主なるらし、

といへる忠度の歌を讀みて、さしもに勢逞しかりし平家も、東夷の逐ふ所となりて西海の邊に泛ひたる事蹟を追想し。又彼忠度の雅致なる、行に宿なくしてなほ「花や此夜の主なるらし」といへるなどを考ふる時は、此歌を味ひ得べく。又西行が大悟したる人物なりしを知りて後、

心なき身にも哀れは、知られけり、鴫立澤の秋の夕暮

なる三十一文字は無限の意あるを知るに足れり。

文學の世道人心に感化を與ふる所以は、これ人間に聯想なる心的作用の存在せるが故にして。高尙淸潔なる文學は人之に對して、自から正義敬虔、眞愛の念を惹起し。且此等を增殖して百般の事物に於て其響聲を反し、精神を洗滌し、神に近づき、德に進み、及ぼして社會に淸風吹噓するに至る。故に高尙なる文學は天より聽ゆる神の聲あり。之れに反して惡文學は地獄より響き來る惡魔の吹聲なり。其聲の過ぐる處は惡毒を流し、世道人心をして相牽きて、魔鬼の口に入りて餌たらしむ。吾人惡文學を見るに假令批評眼を以てするとも其醜惡卑猥の記事は人情の弱點を打ちて、醜惡卑猥の念を呼び出すを免かれず。況んや喜んで之を讀むもの、或は意志未だ定らざる少年子弟に於ける其勢力思ふべし。而して此惡毒は精神に固着して百事に其瀝液を滴せり。靑年が色情の荼毒を甘むの初は主として惡文學の賜なり。德川の末路社會の道義愈地に委したるは西鶴春水の徒預かりて大に力ありと云ふ可し。されば惡文學は戰役惡疫よりも恐るべく忌むべし。戰役惡疫はたゞ肉體を傷らんとするに留れども、惡文學は精神を殺さんとす。其勢や火の枯草を燃くよりも猖獗なり。

聯想の文學に關預する處を通觀し來て知る、文學は容易の業

に非ず、三文書生の玩具に非らざるを。天地を形内に籠め、万物を筆端に挫がんと欲せば、智を研き、徳に到り、硯を攷め、聽を反し、沈思傍訊し心裡に聯想を驅りて後に、毫を吮ふ可きなり。朝飯前目を摩りつゝ、或書肆の番頭に迫られながら綴りたる小説詩歌、世に與へんが爲に非ずして世より金を得んとして作りたる文章豈に眞價ありて存せんや。世には文學の世道人心に感化を與ふるを知らざる盲目文學者多く、臭惡腐敗の文字を聯ねて得々たり。彼等は「ペルセブル」の使族に從ふ惡鬼の族なり、眞理の聲により此等の豚群を驅逐すべし。宗敎敎育の力を假りて社會の改良を企つるもの、又文學に頼り、惡文學を燒き、惡文學者を坑にし、高尚なる文學を世に布かんには其効大に見るべきものならん。文學を味はんとするものは宜しく心を聳くして惡文學の誘惑に勝ち、精神を傾けて高尚ある文學に聽き己れを養ふべし。語るに友なく、世に容れられざるの士よ憂ふるを止めよ、詩書有り、以て古人と談し、聖賢に學び、道に歩み、心を慰むるに足れり、文天祥が風簷展書讀、古道照顏色との語は決して人を欺かず、蓋し人間聯想するあるを以てなり。（完）

雑録

老子を讀む（上）

天知子

亂れたるが故に必要として偉人物を出すか、偉人物を出すの必要として天帝世を亂すなるか、非凡の大怪物往々にして亂壊濁流の中央より躍出する者あるを見る、老子の如きも即ち其一なり。周末天下大亂して國衰へ人腐るの時に當り、陳國苦縣の厲郷に異相の巨人出づ、大耳大目にて髮白く面黄なり、此人名を李伯陽といふ、耳に異觀あるをもて人之れを聃と稱す、蓋し老子は此者の尊稱なり。

老子は非凡の大思想家なり而して絶群の大哲學家なりき、老子は强力の大智能家なり而して多血慷慨の厭世家なりき。

老子は大哲ヘーゲルに最も似たり、而して又ヘーゲルに最も異なるの點多し、彼れヘーゲルが大哲理を發見したるの大刺戟は實に宗敎界にてありし、而して此の老子が生涯の大激勵たりしものは實に政治界にてありしなり。彼れは人と交はるを好まざりし隱君子なりしにも係はらず、勉强なり大學校の敎育者たりしは一に世を愛せしの人なりしなり、而して老子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は社會の衰亡を嘆きし官吏なりしにも係らず、大道廢れて仁義ありと激叫し、道は常に無爲にして爲さゞるなしと論じ、飄然去て遁世の人と成りたり、然れども老子は決して寂寞たる冷血無涙の動物にてはあらざりき、潜屈せる戀愛の熱腸は是を發するに所なく其反動の結果として、強壓的の習慣は終に冷然たる厭世家たらしめしなり、其孔子に警告するや一種嘲罵の口調を以て、「子が言ふ所は其人と骨と皆已に朽ちて獨り其言あるのみ、君子其時を得れば則ち駕し其時を得ざれば則ち蓬累して行く、良賈は深く藏して虚なるが若く、君子の盛德なるは容貌愚なるが如し、子の驕氣と多欲と態色と淫志とは是れ皆子の身に益なし、吾れ子に告る所以のものは是れのみ」更に又苦胸悶々たるものを天に訴へて曰く、衆人は熈々として太牢を享るが如く春臺に登るが如し、我れ獨り泊として未だ兆せず、嬰兒の未だ孩せざるが如く累々として歸する所なし、我は愚人の心なるかな、俗人は昭々たり我獨り昏きが如し、俗人は察々たり、我獨り悶々たりと、ア、老子が『無爲』の大眞理は終に其遁世の行爲を以て多くの人を誤解せしめしなり、蓋し無爲とは「行はざる」の意味に非ず、己れの小才覺即ち最小なる人類の智識を以て同類の人類を制服せんとするの誤ちを醒し、無心にして己れを道の上に修養せば人自から治まらんと言ふにあり、クリスチアンが大信仰の極點として、人の考へに據らず自ら神に熱禱して至誠獻身たらば神の御心は必ず事業に大平和を得べしといふもの是れなり、豈思はず爲さず遊優冷淡の人たれと言ふものならんや、然れども人多く虚僞の空論なりと論ずるものは幾多の誤解より來りしにあらずや、思ふにヘーゲルは天父の大愛を知りて世を愛するの念、老子に一超せし所以にあるべく、此點最も二士が異なるの所とす。彼れは獨逸の亂世に出でゝ砲煙國境に渦巻くを見ながら道を修し、是れは周末壞亂の濁世に出でゝ骨山血河の腥きを嗅ぎて道を錬りぬ、而して彼れは當時聲名嘖々たる中に著書の多くを殘し、是れは當時枯木寒鴉の有樣なる喝采少き中に於て著書最も少なき人なりし。斯くの如く多くの異同あるにも係らず、其哲理の極所に至りては二士殆んど符合するものあるなり。

家政

育兒法 乳母

秋子

抑々世の人愛兒を托する爲めに、最善良ある乳母を撰ぶ事は實に父母たる者の、其愛兒に對する最大一の義務にして、注意に注意を加へ撰擇せざる可らざる事は、孤兒の夭逝する者多きを見て明かなれば玆に多言を要せざるなり、

總て乳母を雇はんには、今其雇ひ入れんと欲する處の乳母を、先づ前に然る可き醫士の許へ送りて、診察を請ひて傳染病の有無をよく撿査を受しめ、且つ假令當時傳染病其他病に罹らざるとするも、其躰質の虚實、よく乳母たるに堪へ得る者や、否やの判定を乞ふべし、

而して後、初めて之を雇ひ入るとするも其乳兒をして乳母の生兒と、共に乳養せしむる時は其害の大なる事は既に醫學上明なる事なれば嚴しく之を禁ず可し、

乳母の年齢は二十歳乃至三十歳を最良の者とす、而して乳母の生兒の年齢は、略々乳兒の年齢と同等なる者を良とす、

乳母の分娩時期は乳兒の生産時期より一ヶ月乃至二ヶ月早き者か、或は一ヶ月晩き者は之を雇ふて可なり、然れども急に臨みて止を得ざる時には、乳兒の生產より大に先だちて分娩したる者と雖ども、試に之を用ひざる可らず、されど大に晩き者は良からず、

以上述ぶる所は乳母を撰擇なすに付きて、最緊要にして欠くべからざる箇條なり、

乳兒は夜間決して乳母と臥褥を共にすべからず、假令へ乳を與ふるの時と雖ども決して同褥をゆるすべからず、世の人多く之に氣付かざれども褥中の空氣を汚して、從つて小兒の呼吸を害する事是より甚しきはなし、

乳母の飮食物は、常に生母自ら注意して多量に過ぎ消化機の變動を起すが如き事なき樣、適當なる滋養物を撰び用ひしむべし、又甚だ熱き湯に浴さしむるは良からずと雖も數々適宜に入浴せしめて身躰を充分清潔に保たしむべし、

小兒授乳の時間は三時每に一回と定め、其飮乳時間の長短は乳兒の飽滿して自ら乳房を放にまかすも、大抵は、十五分時乃至三十分時間なり、

若、六時間乃至八時間授乳せざるも乳房の緊滿せざる時は乳

量の不足の徵なれば、此時は更に他の滋養物を與へて試み、且つ善良なる麥酒を酩酊せしめざる樣少しく與へて身躰の補益を注意すべし乳母身躰の榮養、充分なるや否やを知らんと欲するには時々小兒の躰重を秤量するにしくはなし、而して其躰重二週日に過ぐると雖も猶增す事なく時々變動あるは榮養の不足なるか、或は消化機に變動を生ぜし徵なれば速かに醫士の診察を請はしむべしかりにもゆるかせにすべす可らず乳母の慈哀憂鬱なる時は、意外に害を乳兒に及ばず者なれば宜しく注意すべし、

飲食中用ふべき者

食物　パン類、米飯、粥、新らしき肉類(煮たる者より、炙りたる方よし)菜類、穀類等にて何れも皆調理に心用ゆ可し

飮物　最良の麥酒、ソップ、牛乳、多く牛乳を加へたるコーヒ、茶牛乳を加ふ、葛湯等を良とす、

禁ずべき者

鰻、牡蠣の如き消化し難き物、酸味の類、氷製の類、香科類其他香氣强き者は一切之を禁ずべし動もすれば乳性を變惡せしむるの害あり。

史傳

詩人バイロンの母

狂女カセライン

ロ、ロ、譯

我は虎の如しといひける詩人バイロンは百歳のこのかた瀛西の風騷壇上に嘯けり其竹潭捉風のこゝろざし豈偶然にして來るものならむや葢しいかなる名人の傳記に徵するも其父無情執拗なるときは其母常に雍和清婉の性質をもてり兩親の中いづれか無賴放逸なれば之に伴ふところの人必ず沈刻忍耐の氣風あり豪傑の父母必ずしもうちそろふたる品性を備へざるべし左れど天賦の配與に從ひて陰陽和合の象あらむこと世に多く見るところ古來文學史中に於てジョージ、ゴルドン、バイロンの如き天禀の偉才を抱きつ而も渠の如き不幸ある兩親を持ちしもの鮮かるべし左れば是詩人の瓢蕩不羈なる生涯を知らむとするものは先づ其兩親の性情を探り求めざる可らず傳ふるところに據れば詩人の父は狂人ジャック、バイロンと呼ばれたりといへり祖父の船長の職を奉じ耳順の齡を越え

たることを三歳にして物故りけるが郷黨の間に惡人と呼ばれて家の事など曾て心にかけたりしためしなく吾愛兒だに顧みずして家財家産を賣却し之を以て其放蕩の資に供へたりきといふ詩人の父も亦いたく之に似通ひある人渠をいひて其性行には禽獸に近き非道のこと多しとぞいひけるが其内行の脩まらざりしより見るも渠が放肆逸遊の人なりしこと明し西暦千七百七十八年渠は「リーヅ」侯の夫人なりしカーマルセンを娶りしとき齡僅に二十二歳に足らざりしがカーマルセンは既に二十三歳にして三人の子ありしといへり是カーマルセンといふは容姿こそ世の人に勝れたりけれ天性操節の具はりしかたにはあらず先夫リーヅ侯に離緣せられて直に詩人の父に嫁ぎかくて共に「フランス」へ赴ける也ことにカーマルセンの歳入は一年四千金を超えたりといへば詩人の父が渠を虐待したりとは訛言なるべし此より六歳の程を經てカーマルセンは遂に一女を殘し置き鬼籍の人となりしより父は復び囊中一錢をとゞめざるにいたりぬ渠がカーマンセンとの間に設けしはオーガスタ、バイロン女といひて後にレイ夫人となりたるバイロンの異母の姉なり父いまは寡夫となりぬ眼を放ちてその資産を作るべき良家の緣もがなと思ひしが左るところにて「アベルヂーン、シヤイア」のカセライン、ゴルドン女といふにめぐりあひぬ其資産を問へば二万三千金を持てりといふ蓋し渠はこゝろひそかに其資産の多きを慕ひ是その好める逸遊を極むるに餘りありとこそ思ひけめ然るにカセラインは其資産の多きに似つかはず容姿きはめて醜かりしより容易くこれを娶らむといふものなかりしかば渠の望めりしことを直に的中し千七百八十六年彌生の春「スコットランド」にて結婚の式を擧げたりけりカセラインの父は故ありて自盡し產を擧げて其女に遺しおけるなりといふ翌年の早夏青葉いまだ深からざるころ「フランス」の「パリ」なる「チャンチリ」といへるところに階砌を搆へ二人こゝに移りしにこゝはまた渠が得意の地にして一年のあいだ優に豪遊を極めたりしが幾許もなく又去て「ロンドン」にすめり抑世に座食の徒とは詩人の父のごときをいふなるにやカセラインが貰せしものすらいつしか涸費して今は其家を治むるの資なき日さへすくなからざりしがカセラインは爰にはじめて良人が資産のためにおのれを娶りしことを痛み後日詩人となりし愛兒と先妻の殘しをけるオー

ガスタ女とにほだされて僅に其日を送りしといふ蓋し性來温良なる女子といへども斯る無情なる良人に對してその親實を竭さむこと難し况んや天資多情激切なるがうへ克己反性といふことを知らずして我貫せし資産はことごとく良人の爲に浪費せられしを見ては其境遇のいたく喪家の犬に似るを悲み一念こゝに凝ておそろしき狂女となりしも怪むべきにあらざるなり左ればにや後日人のカセラインを想ひてその放逸なる性情を象するごとき程だにはあらざるもバイロンはその狂母にむかひてまことなる愛情を表し難かりしといへり左はあれどその行爲時としては母らしき眞情を籠めていたく良人の無情に泣きバイロンが悲苦慘憺たる生涯に對して悼むべき辨解の料となること少からざりき詩人の姉オーガスタは常にその別ち難き資産を別ちてこれを其父に與へたれど渠の亂行は些少の金錢に飽くべきにあらず家には婢一人を置き家風いたく節儉を守りけるが良人時に異聲を發して卓前に美酒嘉肴なきを嘆ち財を借りても之を得よといふや狂女頑然としてつねにその首をうちふりぬ蓋しカセラインが性の激切蕩逸なるその良人の非行あるごとに之を鳴してやみたりしためしなく日出て罵り日沒りて罵る良人は我所行の一々詰問せらるゝを懼れておなじ町はづれなる家の一室にこもりこゝに狂妻のいかりを避けたりしといふ左れど奇とすべきはこの狂女なり良人その前にあらば日としてこれを罵らざることなきに良人ひとたび其家を去るときは慟哭してこれを狂ひもとめしといへり古來良人となりてその妻に對し世にいふ齊人のごときものすくなからず蓋し詩人の父もその一人之渠が性の卑賤なるその妻に對して一「ギニア」を與へずやといへる手書を贈りしといふそは渠いま蘇國の生涯に堪えがたくやありけむすべもあらばかの「フランス」へ渡らむと思ひたればなるべし然るに渠が蘇國を辭せざるべからざることといよ／＼さし迫りけるより借財のかさむを見るに忍びずとてカセラインはオーガスタと共にわづかなる旅資をとゝのへ斯て渠を「フランス」へ送りしに是より幾程もなく「バレンセネス」にて物故れりといふ時に渠漸く三十六歲の曉にしてバイロンわづかに三歲の春なりけり詩人のいふところによるに渠が物故れるは世の常の就眠にはあらず苦慮焦心の擒となりて其性の變僻ある遂に自殺を企てたるものなりといふ噫渠が其名を埃芥のうちに埋めたる

は山の如き借財のみか生前の悪德非道いつしか報ひ來りて生國に住するの望だになく異郷に漂死して死後その愁魂を弔ふものあらず眞實の涙痕をとゞめてその死を傷みたるものは僅に生前の狂妻カセラインあるのみなりけり噫カセラインは亡夫のためにかりの愛欲の阱に陥りしかどこれを以て渠が嗚咽を斷ずること能はずカセラインハ生前亡夫の失德をいたみて其面前に呪咀したりしかどこれを以て渠が哀惜を禁ずることも能はず悲報一度かれが耳朶に徹するや其憐むべき痛哭の聲は日夜屋外に漏れて四隣を驚かしたりといふかの三歳のバイロンすら其母の泣聲を聽きては如何斗り頑是なく貰泣をなしたりけむ

狂女カセライン天資野訥之これを以て內に和雍肅穆の氣なく外に幽閒貞婉の姿なかりし渠ゴルドン家の餘流を酌みて統系の世のひとにすぐれたりしといへども左るうまれに似ず豐滿肥大にして顏の色さへいたく赤らみ一見して良家の處女と思はむものあらざりしかの「ベチシヤ」のカーチユルシスにたぐふべくもあらざれど渠二十五歳の頃にいたりては世にめづらかなる醜き女となり清婉を以て雅負する良人にくらべて似つかはしからぬところ多かりし之さはあれど狂女また全く快活のところなきにしもあらず渠が憐愛の情を以ていたく先妻のゝこしおけるオーガスタを慈みしは則ちその一例なり世に厲しき繼母のこゝろとして我が生の子のみを偏愛せむこと常なればカセラインが可憐のオーガスタを朝夕の友として亡き良人のあとを語り暮せしといふは如何斗り聞く人の耳を驚かしけむ左れどこゝにカセラインが性質の世の常にあらざるを讀むべし宜なるかなオーガスタの渠を見て慈母に事ふるごとき愛情を運びたりしこと蓋し狂女の友はオーガスタ一人のみにしてオーガスタの外に狂女の友はあらざりしならむこのオーガスタは詩人「ハーフ、シスター」と呼ばれて其陰腸のうちに入り長く騷壇に知られたるもの之

憶ふにバイロンは其狂母にくらべて克己の性まされりしところあるがごとしバイロンいまだ幼少の頃狂母かれを罵りて啞見と呼ぶやバイロン肅然として見はかく生れたりといへりとぞ曾てなにがしの學舍にまなびたりしころ一友バイロンを見てなんぢの母は痴婦なりといふや吾また之を知らざるにあらずと答へたりしとぞバイロン漸く成身して倫敦にありし頃な

りけむある日狂母と共に諍ひしことありしがカセラインは例の男勝なる忿怒を生じていたく非道の我意を張り遂には火箸を以てバイロンを打着するにいたりしといふ是よりバイロンは狂母が前非を悔ゆるまで倫敦に來りてその姿を見ざるべしといひ袂を振て千八百八年九月「ニユースタツド、アベー」に赴き翌年六月遂に身を孤筇に托し飄颻として「グリース」の風煙をおとづれたりそれより三歳の程を經てバイロンの舊都倫敦に歸るや狂母遠逝の報いたましくも旅寓の卓上の渠を待ちぬ時に千八百十一年孟夏八月の一日のことなりき

その夜バイ女といふものカセラインの亡骸を打護りけるがかう〳〵と明き月はかの狂女の冷枕を射て清風そゞろ聖架殘燈を吹きにけり折しも訝しき泣聲の聞えければバイ女なにごゝろなく四邊を見廻すに思ひきや詩人バイロンの母の亡骸にすがりてあらむとは詩人バイ女を見て「われは世に一友をもてり嗟呼その人今は逝きぬ」と呼びしといふ

"To mark a friend's remains these stones arise;
I never know but one, and here he lies."

噫夏夜しん〳〵たるときひとり寂として亡母の柩邊に座しむかしを忍び音の泣聲はいかに心を傷めしむべき悲讃なるぞや「過去のことは之を忘れむ過去のことは之を許してよ」と泣きわぶる其涙痕も幽明さかひを異にしては徒に母の遺骸を濕すのみなりけり斯てバイロンは篤く其母の亡魂を吊ひしといふになむ

小說

黑頭巾　第二回

十八公子譯

このあさましき現象の噂はいちはやくフーパー氏に先ちて會堂に入りたりしかば、會堂にみちわたれる人とは、みなおどろき騷ぎて、一人として窻の方に首うち傾けぬはなく。多くは肅然として立ちあがり、眞向にそが方をむき返へりぬ。小兒等は椅子の上によじ上りしが、忽ちわたしましき物音させて飛び下りぬ。牧師入り來らんとの報知に伴ひ混雜、いやが上に烈しくなりて、攝々たる婦人が上衣の擦れあふ音、囂々たる男子が足音。雜然として會堂を埋めぬ。されどフーパー氏にはかゝる混雜の少しもこゝろにかゝらぬにや音さへ立てぬばかりいと徐かに歩みつゝ、慇懃に兩側に坐を占

め居たる人々に禮を施して入り來しが、廻廊の中眞なる肱掛椅子によりかゝり居し、この教會にては最も年老ひたる信者なる白髪の老人が前を過りし時は殊に丁寧に禮を施しぬ。されどいと訝かはし。このいみじき翁はかの牧師が面上のあやしきものにつきては左右なくは打さわがで。フーパー氏が講壇に上りて、黒覆面を隔てゝ並み居る信者等と顔見合せしその折までは他し人々の如くは驚かざりけり。かくてもなほかの奇怪の表樣は一度も取り去られで、彼が贊美の歌を奏せし時には折々呼吸の爲めに動かされ、彼が聖書を讀み上げし時に、朦朧たる物影を、彼と神聖なる書との間に投げ。はた彼が祈禱をさゝげつる其間は、かの覆中は彼が仰向けたる面の上をひたと掩ひぬ。ア、彼は、今の今、祈禱を捧げたりけるその畏るべき上帝より己が顔を隱さんとしたるにや。

かくてこの些末なる一片の絹紗は、幾人か神經質の婦人等を會堂より去らしむに至りたりき。されど牧師が目にはこの蒼白めたる會衆の顔色は、彼れが黒覆面のその人々に恐ろしう見えつるほどには、また恐ろしう見えたりしなるべし。

フーパー氏はげに好説教者の譽たかき人なりき。されど活潑々地、神の大御言を雷霆の如くおどろ〳〵しう聽衆の耳に轟かしめて彼等を天上に逐ひまくる方にはあらで、温然惇然、徐ろに感化して彼等を升天せしめんと勉めたりき。今しも彼がなしたる説教は何時も講壇にてなすものと同じかるべき風躰を備へたりしかど、そのいふこととの感情に迫られしためか、たゞしは聞く人々の想像によりてか、かつてこれまで此牧師の唇をもれたるとさへなかりしほどにいと力ある説教なりき。殊にフーパー氏が陰沉なる氣性こそ、常にもあらでいと暗澹たる色を帶ばしめたりしならめ。そが趣意をいふはわれら人間が秘したる罪惡。吾等が最も親み近くべき神の前にその身をかくさんとするとのいとかなしむべきと。はた上天はわれらが罪惡の如きは、何等にても許かせ玉はん力あるとをも打わすれて己が良心よりすらも隱れんとする傾向あるとなんどにてありき。その力のいと鋭かりしは一言隻句の中にもいちじるくて、集へる人々一人として感動せざるはなく。いともあどなき少女子、胸中岩の如く頑なる男子等すら、説教者が彼の恐ろしき覆中の裏よりぬけ出でゝ、彼等が下にとすり寄り、彼等が身に行ひ、心に思ふ山なす罪惡を許かれしやう

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に感じられけん、彼等が胸のあたりにくみたる兩の手を思はず離きぬ。さりとてフーパー氏がいひにし語句には些の恐ろしきともあらず、一句としてあらく／＼しき語もなかりしかど、たゞ悲しげに顫ふ彼が語の中は、聽衆を戰慄せしむるに足りしあり。

目に見えぬ一種の感動は一種の恐怖と共に、集へる人々の手より手に傳はりて、この牧師をばよくは得知らぬ人々は、願くは强風一陣吹き來りて彼の覆巾をば取りされかし。さらばその風采、その身振、その聲さへもフーパー氏につゆたがはねど、まことは全く別人なる牧師なるとを得見あらはさんものをなど思ふもありき。

批評

○烈眞具　紫菀山人

單に文學界の雄將として思惟せられし烈眞具今や赤司繁太郎氏により亦勇壯なる一種の神學者として現はれたり其記する所僅々百頁にみたず然れども其思想の風采活如として紙上に躍り讀者をして其人物如何を想見せしむるに足る顧れば數年間囂然湖溶澎湃たりし我邦の神學海の波濤も今や漸く穩和ならんとす然れども尙ほ未だ雲散し月明に白帆長風を孕むで鯨鯢を叱咤驅逐するの氣運に際會したるにあらざる也魚鱗尙ほ斷續去來し航路未だ燈臺を望見せざるの感なくんばあらず是の時に當りて本書出でたり著者の好意深く謝せざる可らず其神學說はもとより一々感服三嘆すべき完璧の議論とも思はれざるふしなきに非らず然れども彼が眞理を講究するに熱中し其眞面目なる其自信の深き公平と自由とをもて期するは則吾人の好矩規にあらずや故に字句の彫琢なきに拘らず議論の必ずしも穩當ならざるに顧せず方今の教會を稗益する蓋し鮮少にあらざるを信ずる也故に吾人は著者の勞を謝すると共に此偉人物を世に推薦するに躊躇せざる也妄評多罪。

○みだれ咲―夢借舍丁々子著　天知子

怪談、大帑學士、老婚、歌人、の端編四つより成る、怪談は何やら實事談の翻譯物を讀む如く。大帑學士は思想の低き女學生的令孃を穿ちて力あれども、惜いかな理想高尚なる女學生の思想を同時に描き出さゞるが故に、社會の女流に龜鑑を示し、輕薄男兒に女生の胸襟を紹介せざるの恐れあり。老婚は前者に優ると多く、稍々戀愛の範圍に入込みたる者あり、然れども形骸色情的の戀相を最も微温く寫し出したるものたるべし。歌人は最も編中の王たり、亂れ咲きの價は實に此一編にあり、歌人社會が俗骨汚腸の訪問社流に傾きたるの眞相を爆露せしものにして、最も剴切最も健強なる筆鋒をもて、風雅を飾り脫俗を裝ふの鉄面骸骨を慚死せしむるに力めり。案ずるに丁々子は貴族的社會を實見したるの人なるべし、其思想の貴族的めきたる、其文章の優長なる、其躰裁の雅美なる、那んぞ非貴族的の人等が學び得べき所にあらざればなり。

○基督教約說　同上

スピンチル氏の著にして三並良氏の譯に成る、ス氏が特有の健想を以て簡明に新舊約の聖書を解剖し、神と基督と人間とを論じ、終に倫理を說くに至る、所論頗る理性的未信者に適合し、譯筆も健強明解にして最も有益の一本たり、每章節にして何人にも能く會得するの良書なり、

○基督の自然　同上

此書はニューマン、スマイス氏の原著にして小谷野敬三、村木徑篋二氏の手に譯せらる、重もに化身（インカーチーション）のとを說く、頗る高尙に頗る明細にクリストの品性を說くと至れり、是も亦日本社會に紹介するに價あるものなり、

○道の栞

ムーデー氏の說教を戸川安宅氏が譯載せしものなり、測る可らざる愛を說き全編唯愛を籠めたるの一小册子なり、讀下恍然として心書中に埋沒せらる。

○友千鳥―四集

大和田健樹氏の門下の人々が詠出られたる歌集なり、さすが景樹翁の調べを聽く如く、意匠妙えに氣韻こもれるもの多し、春の部を讀むを中ばにして早く歌界の風光に遊ぶの感深し、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

孤兒之友

播州博愛社の近情

社長小橋勝之助君は、昨年尾濃震災後孤兒救育の爲め大に力を盡されたるため、終に君が健康を害せしが、歸鄕以來保養され今や健康大に復し、君は五十余の孤兒の內よりして、廿五名程最も農業に適當なる者を撰ひて、專ら質朴勤儉なる農業主義に教育せられ、本年の如きは玉蜀黍の試作を初め、農事改良に心を注ぎ居らる。且つ當時博愛社には女の手なく、衣類の裁縫などには大に困り居り給ひぬ、余は博愛社の爲め切に希望して止まざるは、女子の献身者が同社に助けられん事なり

震災孤兒院

同院は石井十次君、小橋勝之助君等の信仰と熱愛が形ごりて、震災孤兒の爲めに發起せしなり。名古屋市白壁町に設立せし同院は、今や五十余名の男女孤兒を教育せらるゝと聞く、又同地の信徒も賛成して、其事業を助くる者多しと

北海孤兒院

同院の林竹太郎君、去る二月以來震災地に出で、七名の孤兒を引つれ歸道され、其途路横濱に立寄られて、同港士女の感を惹けり、日增春芽青々茫々たる北海の曠野にピユリタン的の酪農を見る、豈に讃美ならずや

孤女學院

同院は是迄、下谷西黑門町志方之善君方に假設したるが、三月十三日より、北豐嶋郡王子村六百廿一番地大須賀亮一君の宅に於て、廿名の孤女を教育せらる、追ては、目下新築中なる校舍落成せば、本月十日頃に移轉さるゝ筈なり

曉星園本鄕君の來翰

(前略)私儀今回不思儀なる主の御導に由り野州那須郡高林村字青木に當園農業部を設け大兒十余名を引連れ私一人にて(妻を殘し)四月一日發足其方へ罷越心組に略定致候。發足の前に一應拜謁万々御話し申上度候得共彼是多忙にて都合に由れば拜謁を得ざるやも難斗候間何卒不在中も常に御記臆被下倍舊の御眷光の程奉希上候御多忙には御座候得共時々御監督被成下度伏而奉希上候又玆に申上度事は昨日より引取し教育者なり此者は、山田いく(卅八歲)長男武(十六歲)長女ゑん(十六歲)次男一(十三歲)次女なを(十一歲)三女ゑつ(七歲)四女つれ(四歲) 右七名此父は新聞賣をなし月々金三圓斗りを以て養ひ居りしが不圖病の爲めに三月十九日死去(麻布廣尾町木賃宿にて)然るに死體を取片付樣も無之非常に困難如何とも爲す能はず木賃宿の主人は十五歲の女子を娼妓に賣るならば死體取片付してやるとの事母一人にて六兒如何とも爲す能はず故に無據承諾せり然るを巡査の發見する處となりて巡査等發起人となりて同志相集めて不取敢焦眉の急を救ひ金三圓を出して其人質となりし雛をして解き私方へ巡査依賴に來れり素より自分の喜ぶ處遂に家內七名悉く私方へ引取申候殊に母及び長女ゑんの外は七才の時より胃病一人として人らしき顏色なし實に見る影なき有樣なり右七人共にヒゼンシツ全身に覆へり若し此ヒゼンなかりせば既に〱其長女は賣女となりしなるべきを此人々幸に救るゝを得たり御淸閑も有之候得ば實情御覽覧相成度實に不幸中の不幸なる者に御座候今日より病院へ通はせ治療相受さす心組に御座候云々

三月廿八日　　本鄕定治郎

藤井米八郎愛兒

●廿四年十二月より廿五年三月廿二日迄孤女學院へ寄附金物品第一回報告

金六拾錢	明治女學校睦の友
金拾圓也	無名氏
金拾五圓	和歌山中學校外國某教師
金四拾五圓	甲府婦人慈善會
金九錢	名古屋無名氏
金拾五圓	王子村無名氏
金貳拾圓	ビショプヘヤ氏
金拾錢	明治女學校無名氏
金四圓	小島淸子原峰子渡邊澤二郎齋藤卯一郎
金五十錢	明治女學校增田氏
金四十錢	同校藤井某子氏
金貳拾五圓	ウ井リス、エヌ、ホイトニー氏
金拾圓	無名氏
金五拾錢	伊勢川合まさ子氏
金二圓六十錢	明治女學校內睦の友

合計金百四拾八圓七拾九錢

衣類諸道具拾八個并に玩具數品	明治女學校寄宿生有志者
夜具二枚	同
足袋二足	立教女學校林歌子氏
足袋廿足綿入十枚帶一本	明治女學校有志者
雜品十余品	
裁縫道具算盤一個雜品數品	立教女學校小澤きく子氏
綿入十四枚襦袢二十三枚	明治女學校有志者
襟卷一枚雜品數品	同
單衣二枚襦袢一枚雜品數品	立教女學校小澤きく子氏
衣類十六枚夜具拾七枚枕十四個	明治女學校有志者
襦袢拾二枚	立教女學校婦人同志會
玩弄物拾六人分	明治女學校むつびの友
袷一枚襦袢一枚	小島きよ子氏

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

單具八枚足袋六足綿入袷十三枚	東京婦人老人會
綿入壹枚	明治女學校内佐藤すけ子氏
手拭八品	立教女學校婦人同志會
雜品數個	日高まち子氏
下駄六足	吉田のぶ子氏
新約全書六部雜品數品	鈴木庄三郎氏
反物一反	細川靜子氏
讃美歌三冊數のかるた一組	立教女學校婦人會
鋏一丁シャツ五枚雜品數個	同
綿入三枚襦　一枚雜品數個	某夫人
單物六枚襦袢一枚	石崎つる子氏
机一個茶盆一個	王子村無名氏
袷一枚單衣一枚襦袢六枚	無名氏
綿入袷二枚袖なし三枚雜品數品	東京婦人老人會
足袋七足其他數品夜具一枚	同
雜品拾壹個	明治女學校有志者
牛乳一鑵	日高まち子

合計二百六拾九點　雜品數十點

孤女學院にて七才位より十二才位迄の孤女が製造せらるゝ、封筒卷紙等を我が孤兒の友にて取次ぎ販賣す、希ば孤女學院に同情を給ふ君方の求めに應じたし、且つ御注文の各好にも造る事を得べし

女報

可愛子編

●故靜子内親王の五周年祭　去る四日は故靜子内親王殿下の五周御式年祭に付、宮中及び小石川豐島丘の御墓所に於て御祭典あり、聖上兩皇后陛下皇太子殿下より御代拜を差遣はされ、諸親王宮内高等官の諸氏も參拜ありし由。

●小松宮妃殿下　には去る二日午前六時、新橋發の汽車にて三島の別莊へ趣かれたり。

●婦人教育會幹事會　去六日午後三時より、内山下町の鹿鳴館に於て、毛利公爵婦人其他會員出席し、同會幹事の改撰等を爲したる由。

●日本赤十字社に寄附　子爵夫人土方龜子氏外九氏の發起に係る慈善踏舞會收入金の内、壹千四百拾壹圓三拾四錢五厘を、赤十字社病院貧困患者入院施療費の一助として寄贈し向滿一ヶ年間同患者十二名の施療費に充てんとを懇請せられたれば同社にては深く感謝して謝狀を呈せり。

●東京感化院に寄附　又貴夫人令孃方は東京感化院設立の趣旨を深く贊成し、過般慈善舞踏會を催し廣く内外紳士婦人の贊助を求められしが、去月卄日同會幹事總代土方子爵夫人は、同院長高瀨眞卿氏に親しく面會して、同會收得金の内五十圓を寄附したり。

●ソーント女史の歸英　同女史は、長々麻布香蘭女學校の校長にてありしが、都合に依り一時歸英する事に決し、去月十七日東京を出發せられたり。

●普及福音教會の婦人問題演說會　は一昨年より每年數回開會し大ひに婦人に關したる問題を講じ來りしが、本年も其第三回演說會の第一講演を去月二十六日に開き、ザルクス孃獨逸婦人の教育につき演ぜられたり、次回は本月二十三日午後四時よりにして、辨士はムンチンゲル氏、會塲は壹岐坂會堂内。

●普連土女學校の義捐　去る一日芝區三田に大火あり、七十餘戶を燒く、罹災の貧民救助として、普連土女學校より金二十六圓を義捐せられたり。

●露國飢饉救恤　として女子神學校より、金十三圓三十錢を寄送されたり。

●成立學舍女子部卒業式　同校にては、去る二日淺草鷗遊館に於て卒業式を擧行し、高等科卒業生六名、本科及選科卒業生七十三名に證書を授與したるが來賓は南部信氏、大隈英麿、松平信正諸氏を始め、總員四百餘名なりし。

●鳥海女學校　本鄕弓町の同校は、今回科程に改正を加へ、生徒を募集する由。

●貴女繪畫の將來　何事も習ふて達せざるはなしとは云へ、遺傳、天禀の最も其伎藝に關係あるは、既往の經歷に徵して稍々明げく、我國が美術國の名あるも決して偶然にはあらず、されば現時繪畫に彫刻に名工と稱せらるゝ人々は、大抵皆父祖相傳の家に生るゝにあらざれば、幼稚の時より其道に器用なるに基す、是を以て華族女學校の如きはあらゆる生徒に日本繪畫の稽古を強ひず、只各自の望に任せて中學以上のものに修學せしむる趣なり、然れども是等の生徒が望むと云ふは繪畫を全く知らぬも不躰裁なればと云ふに出でて、跡見花蹊、野口小蘋等の諸氏が天禀の筆才ありて此道に達せんと望みたるに異る如くなれば、八十餘の生徒未だ人物を習はん程にも至らず、纔に花卉の寫生位に止まり、筆勢筆意などの所に注意せん程のもの殆ど稀なりとて、貴族中の好畵家は大に其將來を嘆息せりとぞ。（讀賣新聞）。

●手藝教授　下二番町の小林きら子氏は、裁縫、押繪等の手藝を懇切に教授する由にて、目下生徒募集中なりといふ。

●烈女村岡の紀念祭　往ぬる安政戊午の歲水戶家へ下されたる内勅の事に關して幕府の嫌疑を受け、江戶へ護送せられて松平丹後守（松本藩）の物頭田邊覺右衛門氏

へ預けの上、數回の吟味を受けたる後、無事にして京都に歸り、八十餘の高齡を保ちて歿したる、近衛家の老女村岡の事は、近世史に記載せられて人の知れる所なるが、本年は恰も其二十年祭に相當するを以て、同女の甥に當る三崎縫殿氏を始め、其他の有志者發起となり、埋葬地に一の紀念碑を建設し、傍ら一宇を建立して、永く同女の遺物を集め、永遠に保存せんとの企てありて、三崎氏は目下上京なし、一時は敵と目差したる舊松本家及び田邊氏に就て、頻りに其遺物を求め居る由。

●社會問題、賣淫婦の増加　と題して去る一日の國民新聞は論ぜり、廢娼の必要を叫ぶ者益々増加す、以て氣運の方向を察すべし。

●わが宿の花　護教記者、三百十號の女學雜誌を評せり、其中に曰く、若松しづ子譯わが宿の花はホームの實況寫し來りて妙絶、譯筆亦神に入る誰か女流に文學者なしと曰ふや、書中の主人公と見ゆる少女ルーセが、其弟なる幼子の丸き桃色の顏にキッスして「おまへは困り者に違ひないけれど、矢ッ張り、可愛いがらずに居られないよ、子供といふものは、面倒な樂しみだつて人がいふけれど本當に尤もだよ」と曰ふが如き眞情流露硬骨男兒亦泣くべし。(附點は原文の儘)。

●麴街物騒　花風鬼猶ほ九段に出沒し、兇漢更に市ヶ谷に暴行す、悲哉聖下此怪を見る、借問す圓帽角燈の人腰間三尺の秋水を帶して日に何事をかなす。(東京日々新聞)。

●結婚式改良會　茨城縣信太郡朝日村山中惠治氏は、從來結婚を行ふ者あれば前後數日間鯨飲暴食し、式の盛なる割には其結果善美ならずして離縁する者多く、爲に其資用の徒消するを憂ひ、今度結婚式改良會といふを設け、首として離婚の弊を矯め、虚飾華美を銜ふを抑え、尙ほ傍ら早婚の害をも除かんと企てしに、此計畫を聞き加盟を申込者極めて多しとのこと。

●生徒募集　山梨英和女學校にては、去る二日を以て閉校式を擧行し、來る十一日より更に新學期に據りて授業するに付、本科豫科とも、寄宿と通學に論なく、女生徒の入學を許さるゝ由。

●女生徒の鹽山行　山梨縣尋常師範學校女子部の生徒一同には、三月二十一日東山梨郡鹽山向岳寺に詣ふで、同寺の什寶の一覽の上溫泉等を逍遙して歸校せり。

●信州小縣郡雇人の現況　目下同地方に下女下男となりて奉公に住み、竈時に至りて口入換を爲し、案外の勞働賃錢を得んとの目的より、同郡内に入り込める被雇人は、男千百五十餘名、女四百七十餘名、此他雇人受宿又は安泊に下宿し居る男女も尠なからずと云ふ。

●清流女學校　名古屋なる同校にては昨今其の春期試業を終り、更に女生徒を募集する由、尙ほ同校にては今回新たに小田切春陵氏(故小田切春江氏の男)を聘して毛筆畫の教授を托することゝなりたり、同校は從來晩學者の爲めには特に撰科を設けて、隨意に一科若くは數科を專修せしめ、且つ普通の女生徒と雖も父兄の希望に依はて英語學科を除き單に自餘の學科のみを選修し得ることゝなり居ると云ふ。

●岐阜に於ける藝娼妓の増加　目下最近の取調によれば、岐阜市金津廓の娼妓は三百十二名、又同市全躰の藝妓は七十五名なり、今藝娼妓總數を前々月の總數に比すれば、凡そ二十名餘の増加を見るに至れりと。

●廢娼論者　岐阜に於ける廢娼論者は、愈時期の來りしとて、或る有力者五六名は主動者となり一大團躰を結び、縱横無盡に火花を散らして運動し、飽く迄も社會の風紀を矯正し卑猥に陷らざらしめんとて目下同市内に賛成者を得る爲め奔走中なりと。

●大坂に於ける巖本善治氏　大坂青年會矯風部に於ては、今回來遊の巖本善治氏を聘して、去る廿七日午後七時半より同會館にて廢娼大演説會を開きたり、氏が演説は其立論の正確なるは今更云ふまでもなし、只其一言一句悉く衷情より發射し來るものなれば、能く人の肺肝に徹するの力あり、本會は兼て當地諸新聞にも記載しありたれど、多分妨害連も入り込み居り、時々冷評を試みんとせしも、警官の盡力、會員の注意等によりて、先づ無事に閉會せり、聽衆は千五百名許りにして、島田氏の演説以來未曾有の盛會なりき、翌廿八日の夜は氏再び同會館に於て女子教育演説を試みられたり。(福音新報)。

●瓜生岩女の慈善事業　慈善事業を以て畢生の樂事となし、始終一轍其の事に奔走する同女は、昨年東京より鄕里會津に歸省し、相變はらず熱心其の事に盡力し居る由、今歸省後同地方に於て女子の計畫に係る著しき者を聞くに、福島縣下喜多方若松坂下等に育兒會を組織したるに、何れも其地有力者の贊助を得て日に増し盛大に赴きたる如き、墮胎の惡弊を矯正せんには先つ產婆を改良せざる可らずと、自費を以て耶麻育兒會内に產婆研究所を設置し、内務省免許の產婆鈴木きい女を招聘して講師となし、日々六十餘名の產婆及他の生徒を集めて無報酬に講習せしめたる如き、客年濃尾震災の節は河沼育兒會員伊藤しま女を震災者看護の爲め派遣し、剩さへ同會員數十名を坂下町上嚴寺に招きて震災者の爲めに一大施餓鬼會を執行し、且つ耶麻育兒會員に計りて慈善會を開らき醵集の金員物品を愛岐兩縣へ送致したる如き、何れも瓜生女史が盡力周旋したる結果ならざるはなし、又た女史は喜多方町内に於ける赤貧者を何とかして救助せんものと種々考慮中育兒會員小原喜左衛門氏の二男小原喜八(二十二)てふ青年、女史の赤誠に感じて金十圓を送り以て救助の一分に充てんことを求めたれば、女史の感賞一方ならず茲に始めて元資を得たれば、女史と關本もと女と兩人にて尙ほ五圓を投じ、合せて十五圓を以て市中の赤貧者六十餘名へ數日間安米を賣捌きて以て飢饉を救ひたるが如き、又同町内の幼婦女は冬期中爲すべき業務なく、貧者の如きは益々其貧を增すにぞ、此程より機織事業を起し專ら幼婦女を集めて紡績の業に就かしめ居れりと云ふ、又女史は近々機業擴張の爲め福島に出で、夫より上京すべしと云へり。

●仙臺孤兒園　同園は松田順平氏創立者となり、不日天下に告白せんとす。同氏は去る二十六日仙臺を發し、東京を經て岡山孤兒院に至り、數日間實地を視察したる上着手せらるゝ由、因に記す押川方義氏の如きは、これが爲め米國の友人等

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に通信奬勵の勞を取るとを喜んで諾せられたる由。

●北海道の女子教育　北海道に於ける女子教育は、近來大に進歩し、函館の如きは六個の女學校あり、各競爭し東京、大阪邊より女教師を增聘せり、又宗教學校の勢力は頗る衰へたる有樣なるが、是は傳教師中に往々不品行を働きし者ありて、一般に通用を落したると一原因なるべしと云ふ。（毎日新聞）。

●山室軍兵氏よりの書簡　先頃數日間一寸遠足仕り其間一に心に留まりたると之れ有り左に記し申候

◎奈良組合教會　同教會は尙極て幼稚なれども、幸ひ熱心なる數人の婦人ありて、困苦迫害の內にも種々盡力せらるゝ故、前途望少からずとぞ。

◎金峯山　吉野を去る數里の處に金峯山あり、極て高山なれども遠近より之に上りて苦行をなすものも少からざる由なるが、今にても尙婦人の登山を禁じ居れりとぞ。

◎富田林　富田林は河內の一市街なるが、風俗極て頽敗し、現に湯屋の如きも今尙殆んど男女混合の樣にて、互に醜言妄語を交ゑなどし、聞くに忍びず見るに忍びざるものあり。

◎レプタ會　神戶、女子傳道學校第一の卒業生等か創設せる同會は、爾後增々好都合にて、既に今迄に數人の婦人を補助して同校を卒業せしめ、今も尙數人を助け居れりと云ふ。

◎日本傳道會社の議決　此度大阪に開かれたる日本傳道會社の年會にては、新に女子傳道部を起すとに付相談せしが、既に此事に付ては新に有志婦人の奔走し居らるゝ者もあるとなれば、成るべく干涉せずして、先方より相談ありし節、兎も角も取計ふべき答に決せし由、右等の評議ありしが爲め、大坂京都の有志婦人の或者と、女子傳道學校生徒の大半は、態々大阪に行きて、同會議を傍聽せられし由。

四月二日

●千葉縣通信　◎千葉尋常師範學校　にては今回男子十五名、女子十三名の卒業生を出せり、內女子の姓名は、杉山ちか子、古宮せん子、永田きわ子、秋山れい子、新橋きく子、杉山さだ子、靑木ちよ子、根本はま子、大岩きん子、高橋とみ子、山口かよ子、八木ヶ谷りん子、桑田はる子。

●靜岡縣通信　◎靜岡女學校　は三月三十一日を以て閉校式を擧行す、小林傳道師感謝の祈禱、生徒祝文朗讀、英語の暗誦、演說對話、彈琴等あり、右終りて生徒一同へ修成證書を授與し、日本女禮の式あり、躰操あり、唱歌あり、最後に一致敎會の傳教師光小太郞祈禱をなし、午後九時三十分にて式終れり。

◎四月二日三日の兩日を以て靜岡女子の懇話會の婦人は、淺間公園にて慈善會を開く、その賣上金を以て岐阜震災に罹りし學校へ寄附さるゝ由、婦人慈善會の靜岡に起るこれを以て嚆矢とす。

●三重縣通信　◎養正同窓會女子部　同會男女子兩部の合併論のとは前號に報道せし處ありしが、今聞く處によれば女子部當今の有樣は迚ても合併論の實行すると六ヶ敷ければ、先づ之を見合せて女子部に二名の部長を置かむとするが至當ならむとの說ありて、例會の節之を發議せしものありしかども、此議は一と先づ幹事に委托すべしとの說に决定せし由、因にいふ同女子部はこれまで會員四十三名なりし處、このたび養正高等小學校卒業女生徒七名入會して、今は總計五十名となりぬ。

◎若松しづ子女史を批評す　過ぎつる頃女學雜誌に五々生の名前にて「言文一致は昔からある」てふ一篇の論文をよせたる中尾淸太郞氏は、なか〳〵文學に熱心にして、この頃同志の人々と「小詩人」なる一文學雜誌を發行せり、その「時文評論」のなかに貴社員若松しづ子女史を批評するの言にいはく、

「忘れ形見」の美なるとは、忍月之を「閨秀の二妙」に數へてより幾度となく囃しき。不知庵も之を最傑出の作と定めぬ。尙ほ其他も云ひぬ。其作者は若松しづ子。女史の伎倆は此にて我十分に認めぬ。「小公子」の譯は女子誇るべき事業にてもなからむ。「忘れ形見」以來淸影に接せざる久し。敢て濫に玉韵を惜むなかれ。

●京都通信　◎結婚　熊本英學校事件に付、女學雜誌にも寄書せられたる柏木義圓氏は、此度京都に歸られ、淡路の人平瀨某女と婚し、專ら同志社學校內の傳道に從事せらるゝとゝなれり。

◎貧兒學校の新設　新島未亡人、小崎夫人等の發起に使り、貧兒學校を室町通今出川上る同志社敎會附屬講義所の內に設けらるゝとゝなりし由。

◎女子傳道部　京阪神の有志婦人は、女子の爲に傳道會社を新設するか、或は今の傳道會社の內に女子傳道部を設置せんと、種々奔走せられ、近々大阪に小集會を開き、又た神戶に催さるべき婦人大祈禱會にも持出して贊成を募らんと決心なし居らるゝ由。

●巖手縣盛岡通信　◎佛國女教師の來盛　當地天主敎會にて女學校を興すを以て、內外の教師數名を聘したる由なるが、去頃佛國人童貞オノリーヌ、ジョセフ。マリー、アスパジーの二女來盛せらる、右女史等は十數年前我邦に渡來し、爾來京濱及函館にて女子教育に從事し居られたりと。（三月廿八日發）

◎梅莊女史（廿五）歲とは、本縣第二區撰出議員鉄道廳事務官阿部浩氏の令夫人の別號なり、夙に長三州翁の門に入りて書法を學ぶ、筆力雄渾、書法佚宕、女史の手にあらざるかを疑はしむ、女史又文學を嗜み兼て畫を巧みにす。

◎外國女敎師又來る　前にも報ぜし如く、當地天主敎會女學校の招に應じ、去廿五日又々葡萄牙人アリヤベレイラ、支那（當時佛領）人マリー、サンド、ジエスチームの二女史來盛せらる、聞く所によれば、ベレイラ女史は當時葡國元老院議官たるベレイラ侯の令孃にして、現任本邦駐剳同國公使とは叔姪の間柄にて、現に此頃まで童貞となり、マカオ女子師範學校に於て語學の敎授たりし人なりとか、又ジエスチーム女史はサイゴン學校出身なりと。（以上三月三十日發）。

●土其古皇帝　はコンスタンチンノープルの市街に住む土其古婦人が、巴里好みの衣服を着するとを禁じたり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

品名	四月七日
白米（一円ニ付）	
一等米	一斗〇升〇合
二等米	一〇一
三等米	一〇三
四等米	一〇六
五等米	一一二
正米（一円ニ付）	
越中米	一斗四升一合
越後米	一三九
南部米	一五〇
土浦米	一三七
行方米	一三二
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二斗九升〇合
上州小麥	一七二
竹林麥	一九三
梅澤大豆	一九五
青柳大豆	一九五
吟小豆	一六二
白胡麻	一一八
黑胡麻	一四五
鹽（一円ニ付）	
赤穗	俵 三、二五
大鹽	三、三五
本齋	五、五〇
新齋	五、九〇
醬油（一円ニ付）	
最上	
極上	
上物	
中物	
並物	
（醬油の部の価格欄）	樽 分厘 七四　七九　八七　一、一〇　一、三〇　一、六〇　一、八〇　二、〇〇　二、一〇　二、七〇
味噌（一円ニ付）	
地製上白	貫 六、八〇〇
同 上赤	六、八〇〇
同 紅赤	四、三〇〇
眞綿（一個ニ付）	
上々入金	一一三、〇 円
上入金	一〇五、〇〇
並入金	九八、〇〇
松入金	九〇、〇〇
竹入金	八五、〇〇
梅入金	八〇、〇〇
八王子織物（一反ニ付）	
本糸織	四、二〇 円
同 替立	五、四〇
同 珍柄	六、九〇
節糸織	三、三五
同 瓦斯入	二、〇〇
一樂織	七、三〇
飛地黃八丈	三、五〇
黑地黃八丈	三、五〇
岸紵	二、三〇
玉八丈	三、〇〇
甲斐絹	三、五〇
同本場	四、五〇
黑八丈	七、八〇
黑七々子	五、〇〇
白七々子	六、〇〇
嘉平治平	四、七〇
節仙臺	六、〇五
仙臺平	七、五〇
白木綿（一円ニ付）	
玉鶴	反 三、四五
綾鶴	三、七五
日の出鶴	四、〇五
若柳	三、一五
稻岡	三、四五
兒玉	三、七五
蓬萊	四、〇五
改メ	三、五五
間銘	四、〇五
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稀大頭	二、五五 円
同 稀頭	二、一〇
同 大頭	一、七七
同 中頭	一、五五
同 中茶	一、二〇
狹山稀大頭	二、〇〇
同 稀頭	一、七五
同 大頭	一、五〇
同 中頭	一、四〇
同 中茶	一、一〇
乾海苔（百枚ニ付）	
洲崎	七五 錢
大森	七五
深川砂村	七五
大師河原	六〇
潮田	五〇
上總	五五
鰹節（十貫目ニ付）	
土佐	三三、〇〇 円
薩摩	一八、〇〇
城の腰	二一、〇〇
銚子	一七、五〇
房總	一八、五〇
水油（一樽ニ付）	
地水	六、五〇 円
胡麻	一〇、二〇
荏油	一〇、〇〇
桐油	六、二〇
夲	七、四二
坂水	七、五〇
石油（一箱ニ付）	
チヤスター	……
デボース	……
ホーキ	一、六四 円
ロシヤ	一、六三

『女學生』大に變化一進して小學女生諸君の上にも友たらんとす

一 春風吹き來りて百花爛熳たらんとするの候、女學生大に千紫万紅の裝ひを一進せずんはあらず、

一 同盟せる高等女學校の秀才、筆大に熟して一層小學女生の上にも博く友たらんとす、

一 故に面白き趣向をも加えたり、即ち、野邊の遊び博物の園、秘藏箱、文學時事、家の友、理科の話し、詩歌の巻、古文庫、小說、餘興等の欄を增したり、

一 別に「文の林」欄を設けて廣く小學校女生徒の文章をも掲げんとするが故此等の投書をも募るものなり、

一 代價も、追々愛讀者增加するを以て一層奮發する所あり、即ち四錢に改めたり、

一 改まりて出づる廿三號は來る廿一日を以て發兌す、

下六番町六番地

女學雜誌社

女學生發兌部

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ページ
定價郵便共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なることなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計、吾校之を版にして、世の同志に示すこととす。

全篇十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何をか中正の旨義と云ふ……三十
女子敎育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子敎育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本の編纂……九十二
女禮と躾操……百
上躾操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君內助の辨……百五十九
當今女子敎育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

發兌元　明治女學校

發賣元　女學雜誌社
東京下六番町六番地

●女學雜誌大賣捌所○東京。東海堂○同武藏屋○同巖々堂○同重陽堂○同東京堂○同盛春堂○同解明堂○同團々社○同万字堂○橫濱新聞共同發賣會社○大坂福音社○同岡島支店○京都東枝律書店○同大黑屋書店○神戶福音社○函館福音社○熊本草野書店○松江盛進堂

女學雜誌社出版書目

著者	書名	郵稅	冊數	價
鈴木弘恭大人述	つれづれ草講義	二錢	一冊	價金八錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	同	一冊	同十六錢
船越鼎太郎君著	產婦小兒攝生法	同二錢	一冊	金十六錢
中島俊子君著	善惡之岐	同四錢	一冊	同卅五錢
橫山雅男君著	婚姻論	同四錢	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說	廢娼演說	同二錢	一冊	同五錢
巖本善治君述	妓樓全廢	同二錢	一冊	同五錢
島田三郎、巖本善治兩君著	公娼可滅	同二錢	一冊	同四錢
農學士寺尾熊三君著	植物學	同二錢	一冊	同十二錢

下六番町六番地　女學雜誌社

通信女學第三期生新募廣告

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして舊發學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の强勉をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆學問と云ふことに心掛け凡そ此心掛なきものは常今の女德に欠けしやう思ふに至りぬると明治の代の恩澤にて有がたきと云ふべし、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も茲に入學して日々の進歩目覺しきとなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學するとも出來ず又家に敎師を引て敎を受るも甚だ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨及一昨年一月通信女學の仕組を新設し、毎月一冊の講義錄を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便に供へたるが、其十二月に至り、一ヶ年の課業を恙がなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの八百餘名あり。然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第三回の習讀者を募る。

敎授科目左の如し。

萬國史、日本歴史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學、衛生、育兒、看病と合す）裁縫、圖入地理、英學。

敎師は、醫學士三島通良、農學士寺尾熊三、吉田伸子、渡邊辰五郎諸氏其他重もに明治女學校の敎員諸君に委賴し、專ら深切鄭寧を主意とす。

代價一冊前金三十二錢（無郵稅）、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

明治二十五年一月廿五日第一號を發兌し、以後毎月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麴町區下六番町六番地　**女學雜誌社**

第四回豫約出版廣告

文科大學教授　物集高見先生著

ことばのはやし

全一冊　凡千八百頁　豫約正價金二圓九十錢見本附郵稅二錢●豫約期限四月三十日豫約金一圓御送附殘金は五月十五日より送金の順序を以て製本を遞送す

右は古代より國語を集めたる字書にして註釋詳明例文許多なれば國文研究に至便なり曾て第三回勸業博覽會に於て公衆の評に由り時事新報社より金牌を得たる美麗の珍書なるとは余が喋々を待たず今已に一本を殘さず因て又第四回豫約を募り五百部を限り印刷に附し有志諸君の請求に應ぜんとす請ふ期限を誤る勿れ幸甚

●女學雜誌社出版書籍

右今般本社ト特約ノ上販賣仕候間續々御注文ヲ乞フ

東京市日本橋區本町三丁目

瑞穗屋清水卯三郎　謹白

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版 百人一首講義

正價金廿八錢　郵稅四錢

御高評を得たる百人一首新年に至り注文いよ〳〵多く第三版品切に成りたれば茲に第四版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〴〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すとを得る至極重寶の案內書なり。

發兌元　東京麴町區下六番町六番地　**女學雜誌社**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學生徒募集

當學期試驗來月初旬に終り、各級に入學生を募集す、有志の者は四月中に申込まるべし、當校設置の各科左の如し（但し規則書は郵劵二錢を贈らるれば速かに贈呈すべし）

○高等科（高等の教育を望む者の爲めに二ヶ年卒業の仕組にて設く）

○師範科（女教師志願者の爲めに設く）

○普通科（高等小學卒業者は無試驗にて幼年級に編入す）

○幼年科（高等小學以下の程度に應じ專ら幼稚者の爲に設く）

○專修科（英學、漢學、和學、繪學、音樂、女禮、裁縫、速記等專修志願者の爲めに設く）

麹町區下六番町六番地

明治女學校

●●女學雜誌賣物廣告●●

第二百五十一號より第三百號迄五拾冊相揃

右ハ五拾冊相揃六拾卷丈別段本社ニ備付有之候處、第一號より續々御註文に付今回特別代價引下五十冊一時に御買取の分は郵税共金壹圓にて御求めに可應候部數に限り有之候間至急御申込に相成度候也

右五十冊中の重なる記事は（社說）●吾黨の改革事業 ○日本の基督教 ○殖民論 ○婚姻論（見鑑）○教育者の快樂 ○山中獨語 ○天災地震 ○小公子（小說）○無浮雲胸 ○紫海の嵐 ○流れの葦 ○今はむかし ○文想劍 ○腹中の蛇 ○枯尾花（文學）花月の遊 ○女性文學上の德義 ○ミルトンの詩 ○至誠と詩歌 ○女學史

女學雜誌社出版部

廣告定價

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行　一回　（廿七字詰）　前金拾錢

同　三回以上　一割引

同　六回以上　二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし。

早稻田文學第拾貳號目次

釋義　莊子　三島中洲氏

詩經　信夫恕軒氏

万葉集　畠山健氏

講述　論理學　大西祝氏

評註　丹波與作　饗庭篁村氏

マクベス　坪内逍遙氏

雜錄　支那小說の話　森槐南氏

詩話　野口寧齋氏

詩は志を言ふとは何ぞや　齋藤木氏

時文評論

韻文所見（湖處子）●劇評界●田口氏久米氏を辨護す●久米氏事件の餘波●『日々新聞』の幽便客父●近刊雜誌●小反動●井上博士連に支那哲學を談ず●三位一躰●紅葉山人●近刊●『早稻田文學』が谷『時文評論』村の緣起●寄手東より西よりせまる

●●特約大販賣店廣告●●

東京市日本橋區本町三丁目

瑞穗屋　淸水卯三郎

今般同店と特約致し弊社出版書籍及雜誌大販賣候間本社同樣御用向被仰付度候也

東京麹町區下六番町六番地

女學雜誌社

發行所

東京市麹町區下六番町六番地

女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY